



Кни **渴望の書** *novel*

ソロゲーズ

翻訳：春色



Белая березка

白樺

——親愛なる人よ、白きものよ。

白樺に見惚れ、自宅の庭のベンチに腰掛けて囁くのは、——小さくて痩せた、青白い顔の少年だ。明るいいリンネル地の上着を着ている。

彼は軽く背を曲げていた。ほんの少しだけ日に焼けた腕は、膝の上で横たわり微睡んでいるかのようだった。

背後から静かに近付いて来た少女が、不意に大声で笑い出した。紅潮した顔に笑いが広がり、茶色の瞳にもその感情のみが見える。彼女は弟と並んでベンチに腰掛けると、こんなことを言い出した。

「白樺を見ながら、リユーバチカ（注：リユーバカの親密な呼び方）のことを楽しく考えているのね。馬鹿ねえ、セリョージャは！ 彼女には婚約者がいるのよ」

はっきりしない落ち着いた表情で、セリョージャが姉を見た。それはまるで、彼女の言葉に耳を傾けてはいるものの、一向に意味が分からないかのようであった。それから彼は溜め息を吐くと、ゆっくりとした口調で話し始めた。

「呆れたことを思い付いたもんだ！ リユーバカだなんて！ なんて面白いんだろう！ 沼のヒキガエルで一等綺麗なものと比べりゃ、三倍くらいは美人だもんな！」

少女がふざけて大声で返した。

「ちょっと、馬鹿ねえ！ 年頃のお嬢さんのことを、そんな風に言っていていいと思ってるの？」

セリョージャは穏やかに彼女を眺めると、言った。

「ジーンカ（注：ジーナの愛称）、君は何も理解できちゃいないんだ。悪口の言い方は覚えたけどね。もしもまだ僕を馬鹿と呼ぶつもりなら、また水に突き落とすぞ」

ジーナは半ば怒ったように、半ばそう見せかけているだけのよう、不機嫌に言い返した。

「誰が誰をまた水に落とすって？」

彼女は立ち上がり、弟に「お前となんて話したくないよ」と捨て台詞を吐くと、黒いお下げを揺らしてその場から去っていった。

ジーナがすっかり見えなくなり、彼女の踵が踏む砂粒の軋るもの悲しい音も聞こえなくなってから、セリョージャは優しく白樺に近付くとびったりと寄りかかり、細い彼女の薔薇色がかった白い樹皮に口づけた。軽い震えがほっそりとした白樺の体を走りぬけ、樹木を飾る陽気で無邪気な小葉がさらさらと鳴り、そして頭を朦朧とさせる北国の白い白樺の香り、甘い香りが優しく少年を包み込んだ。セリョージャは静かに白樺を抱擁すると、繊細で感じやすい頬を白樺の滑らかな薄板に寄せるのだった。

夜だった。北国の軽やかで澄んだ、幻想的な夜だった。娘達が庭に腰を下ろしてしていた。彼女たちはどこへも出かけなかった。昼に疲れたからだ。笑っていた。彼女たちのその声は、セリョージャには不愉快であった。彼は上階の狭い自室へと戻ると、窓の傍に座った。そして薔薇色がかった不思議で美しい空、これほどまでに意味がなく同時にどこまでも意義のある、を眺めながら、彼女たちが立ち去るのを待っていた。

セリョージャは待ち遂せた。全く静かになった。少年は庭へと降りると、彼の白樺へと近付いた。

別荘は高い崖の上にあった。その下では川がさざめきながら、岩に沿って流れていた。川は絶えずさざめいていた。静かに、強情に、変わることなく。さざめき、打ち寄せる。霧で身を覆った川は、音を立てた。岩に、岸に当たってはさらさらと。

緑かがった華奢な体と、緑色の輝く瞳を持った、細い細い長枝のようなルサルカ（注：水の精）が、川から上がって来た。ほっそりとした彼女の体を透かして、向こうのものが微かに光って見えた。好奇心に満ち熱中した様子の彼女の瞳は、何らかの理由で周囲に隠されている我々の妖精とは異なり、生気がなかった。

細く緑かがった白い幹を持つ白樺は、甘い匂いのする粘ついた小葉を、さらさらと静かに震わせた。さやさやと音を立てて、囁いた。震えた。

この世のものならぬ存在が茂みを掻き分け、呼びかける。

「私のところに来た方がよいよ。私と居る方がより楽しいさ。彼女は黙っているじゃないか。私はお前に、たくさんの物語を話してあげるよ」

セリョージャは怒って、口を開いた。

「行っちまえ！ 僕に必要なのが、お前のお話だって？ ハウフの物語は読んだのか？ 読んでないんだろう？ アファナーシェフは知っているのか？ 分かったか。出て行けよ」

ルサルカの笑う声は、ガラスのように細く高く、よく響いた……。軽やかで澄んだ、幻影のような彼女は、笑って立ち去った。アシの茂みの近くで、長いこと囁いていた。早口で、何やら不明瞭なことを……。笑うでもなく、泣くでもなく――ただ不服を訴えては、笑うのだ。ルサルカの笑い声、かすかな涙。ルサルカの笑い。岩の周囲でせせらぐのは、水の音。

何について囁くのか。何に対して、笑うのか。何を訴えるのか。

どの昼も暑かった。既に夏であった。既に草は青く、白樺の葉は光に満ちていた。一方で、急かしていた。灼熱の夏は急いでいた。

何かしなければ。白樺のべたつく葉が黄色くなるよりも早く。白く、豊かな、かわいい白樺よ！

セリョージャは白樺の下のベンチに横たわった。すると被さるように、彼の白樺が立つのだった。立っていた。風に揺れていた。とても静かに綺麗な小葉をさらさらと鳴らして。かくも陽気に、かくも物憂げに……。

そこに、いとこのリーザが近付いて来た。彼女は陽気で頬が赤く、眼と髪の高い美人だ。最近夫を亡くしたが、以前と変わらぬ陽気さと魅力とを取り戻していた。彼女は近付くと、セリョージャを覗き込んだ。青々とした公園に広がる、白樺の枝のねばつく小葉たちの優しい芳香とは対立する濃く不調和な香りが吹いた。そして彼女は、セリョージャをからかい始めた。これは彼女の癖であった。

彼女は愛想よいほどに、優しく呼びかけた。まるで彼と会う約束でもしていたかのように。

「セリョージャちゃん！」

意地の悪い薄笑いとおぼろげな嘲笑を隠して。

セリョージャは怒ったように答えた。

「ちえ、なんだい？」

既に彼は予想していた。リーザが好ましい理由で来たのではないと。あの赤ら顔の太っちょな彼女が、一体いつ親切でやって来たことがあつたらうか？

（大女め！）——セリョージャは心の中で猛烈に罵るのだった。

彼は眉を顰めると腹ばいになり、わざとらしくのんびりと脚をぶらぶらさせた。

愛想良くリーザが尋ねた。

「かわい子ちゃん！ 寝そべっているけれど、立ち上がれないのかい？」

「何だって？」 理解出来ないまま、けれども既に忌々しさを感じながら、セリョージャは問うた。

またリーザが尋ねた。「白樺の下に寝転んで、ジーノチカのことを考えているのかい。彼女のところに行けば良いのにさ」。

セリョージャは怒って言った。

「馬鹿な！」

「ひょっとして、お腹が痛いんじゃないの？」 再びジーナが問い掛けた。

それから音を立てずに笑うのだった。

「馬鹿馬鹿しい」。セリョージャは怒って答えた

「ジーノチカの口紅を食べ過ぎたんじゃないの？」 妙に優しくリーザが尋ねた。それから彼の頭を、柔らかくて優しいけれども逞しすぎる手で撫でた。

セリョージャは怒って叫んだ。

「なんという馬鹿馬鹿しさだろう！ ジーノチカはまだ口紅を持っていないし、塗ったこともないじゃないか」

「君、どうしてそれを知っているの」。リーザはそう問うと、笑った。「彼女のところを探してもした？ でもそれは良くないことよ。盗んだのは口紅ではなくてリボンかしら。どこにやったの？」

彼女はセリョージャのポケットに手を突っ込んだ。

「ポケットの中ではないようね」。

セリョージャはぱっと立ち上がると、素早く走り去った。そしてしっかりと距離を取ると、彼は立ち止まり、悔しさのあまりに声を上げて叫んだ。

「とんでもなく厚かましい未亡人め！」

リーザは楽しげに笑うと、彼女と同じように腹黒く、このように無礼で、大柄な人たちのところへと戻って行った。彼女にとっては、取るに足らない単なる気晴らしであった。彼女は今すぐにでも忘れてしまうだろう。だがセリョージャにとってみれば、一日の全てを台無しにされたのだ。

一日中、ジーノチカの嫌な口紅のことが執拗に思い浮かんだ。一度もジーノチカのところには存在しなかったにも関わらず、そのせいでセリョージャは嫌な味を感じていた。彼は確かに食べ過ぎたのだ。この空想の口紅を。

見ることの叶わぬ幻惑の全て——良きものも、悪きものも——は、揺らぐ無意識の靄の領域より立ち昇るのだ。

再度、夜となった。しっとりとした静やかな夜。多数の沈黙、無数の静寂の群れ。夜だった。

庭に静かに佇む木々は皆、聴き入った。空想を描いた

夜だけが彼らに囁いた。ひそやかに囁いた。だが彼女もまた黙り込んだ……。

彼らは耳を傾けた。青白い顔をした、もの思わしげな少年が静かに語ることに。

ひそやかな暖かい霧が、野から立ち上がった。しばらく足を止め、黙し、耳を傾け、夢を見た。白いひそやかな沈黙の中で、まどろむ。

かすかにひそやかにセリョージャが口を開いた

「愛するお前、かわいい白き白樺よ。ただお前だけを、愛するよ」

悲嘆にくれた微かな、誰のともつかない声——軽い溜め息のような、甘い笛の音のような——が尋ねた。

「どうして？」

セリョージャは答えるために口を開いた。

「お前を愛しているよ、春のお前を。話すこともなく、笑うこともなく、からかうこともない。お前は僕の喜びのために成長してくれた。春の充ち足りた幸福のために」

小さく消えながら、悲しみに沈んだ囁き声は問うた。

「喜びだけのために？」

「分からない」。セリョージャは答えた。「お前は成長したけれど、黙ったままでいてくれる。お前は何も欲さず、誰をも待たず、誰をも招かない。欲しがることなく——いや、欲していたんだ。こんなにも心地よく、こんなにも確かに欲しているんだ。お前が望む通りになるだろう。枝は広がり、広々とした場所へと伸び、小葉で覆われた。全くの白き、全くの沈黙の、僕の愛おしい白樺よ。お前は僕を可愛がってくれた。お前はキスをしてくれた。お前は僕の喜びだ」

「喜び。苦しみではないの？」 近くに潜むものが、もう一度悲しそうに問うた。

「例え苦しみだったとしても」、静かにセリョージャは答えた、「それが何だと言うんだい。ほら、お前にこうしてもたれ掛かると、僕もお前も甘く気持ちよくなるだろう？」

「甘くて気持ちが良い」。白樺は静かに優しく、さらさらと音を立てた。「君はそれで良いのかい？」 彼女は静かに囁いた。

セリョージャは彼女に寄りかかった。彼女のすらりとした幹を腕で抱きしめ、頭を心地よい樹皮にもたせかけた。彼は甘い恍惚の中に立ち尽くした。

希望が彼らを苦しめた。憂いと悲しみとがあつた。誰かが泣いていた、こんなにも近くで、こんなにも悲しげに。——泡のように膨らんだ草の編み髪をしたルサルカの嫉妬深い泣き声が、透明で繊細な音を立てた。彼女の目に隠されていた冷たい涙が、草色の睫毛の陰から落ちた。

庭には、溢れんばかりの春の悲しみの霧。湿った谷間から、弱々しい白い異形が現れた。それは己の古くからの仮面を失い、けれども未だ新しい顔を見いだしてはいなかった。はっきりとした輪郭を持たぬ霧と溶け合いながら、それらは立っていた。苦しみ、夜の弱々しい哀愁の冷たい溜め息を吐いた。

生気の無い悲しげな顔が、高い位置に現れた。だが、その魅力は弱々しかった。

絶望と愛……。

冷たい霧が揺れた。川の上の公園、霧の中、未来を見通す冷たく弱々しい月の下、生気を失った哀愁に木々は苦しんでいた。

二つの命は結びついて震えた。恋する狂喜の炎に燃えた。彼らは辛い絶望の抱擁を味わっていた。

彼ら二人は、絶望的なほどに遠く隔たれた存在であった。だが生命の結びつきの中に在るありとあらゆる二つの魂と同じく、彼らは自らの畏怖と意志を結び合わせ、互いに互いの全てを捧げ合っていた。弱々しく震える彼らの二つの体は冷えつつあり、疲れ果てていた。

周囲に溶け込み、決してこの世の顔を見せることのない「彼女」が、近くへとやって来た。彼女は待っていた。彼女から彼らへと、魅惑が広がった。それは生命の全ての狂喜と魅力よりもまだ強いものであった。

彼女が問いかけた。

「愚かなお前、何を望んでいるのだ？」

甘い樹液を流しながら、白い白樺が囁いた。

「ほんの僅かな時間よ！ 光りの差さない日常と、存在の重い枷——ああ、私にほんの一瞬の燃えさかる瞬間を頂戴」

瞬間の狂喜の稲妻によって、白樺の細い体の全ては燃え上がった。そして幸せな狂気の叫び声と共に地面へと崩れ落ちたのは、二つの細い、二つの震える冷たくなりつつある体であった。

楽しき夢

Сон утешающий



セリョージャは死につつあった。

受難週間だった。家ではいつもと同じように、祭日の準備がされていた。子どもにとっては嬉しく、大人にとっては喜ばしき祭日——卵を洋紅で染め、クリーチのために熱湯にサフランを溶かし、パスハ用にカッターチーズとサワークリームを捏ねた。

バニラとカルダモンの香りがした。

寄せ木細工の床には、ワックスが塗られた。埃と泥は周囲から注意深く払い出され、窓は洗われた。女中はヘトヘトに疲れてしまった。セリョージャの姉妹たちである令嬢は、楽しいキスに憧れたが、その一方で、嫌な人とも口付けを交わさなければならないのだと考えては、顔を顰めるのだった。

セリョージャは、家具が部屋の空気を奪わぬようにと、特別に広々とした人気のない部屋で横になっていた。そこには伝染病予防剤（ザロール）が甘ったるく漂っていた。彼は死につつあった。

セリョージャはまだ15歳であった。賢く陽気な子であった。家の者は彼を愛していた。春は始まっていた。復活祭の祭日が近付いていた。セリョージャの姉妹達は、喜びを欲していた。死を考えることを恐れていた。

セリョージャが死につつあること、祭日前の慌ただしさにかくも相応しくない事態さえも、全員の心を欺き、彼らにこう考えさせた。この祭日のおかげで、彼もまた自分の状態を普段よりも良く感じるのではないかと。

ずっと以前から彼は病気であった。どこかへと転地させることは決まっていた。けれども何となくぐずぐずとしてしまい、どこへ連れて行くのかなかなか選ぶことが出来なかった。しかし特に理由もなく突如、肺の経過は余りにも早く進み、セリョージャは余りにも衰弱してしまい、彼を運ぶのは不可能となった。移動は疲労させ、それに温かい気候ではどちらにせよもう彼を守れないのだ。

若い医者は途方に暮れた後に、セリョージャの父親に向かって口を開いた。

「一ヶ月以上ではないでしょう」

年老いた医者は無頓着に、疲れた様子で言った。

「ええ、あるいは六週間ほどですか」

セリョージャの父親は落ち着きのない様子で彼らを見送った。彼の顔は赤く狼狽しており、動作はぎこちなかった。セリョージャが死ななければならないということが、どうしても彼の意識の中に収まらなかった。彼の思考は緩慢で鈍かった。

食堂の暖炉の上に設置された鏡の前で彼は動きを止めると、何故だか長い時間自分の顔を見詰めていた。脇腹の方まで這って行った白い胸当ての上の黒いネクタイを直し、それから震える指で白くなり始めた口ひげを撫で付けた。

なんだか決まりが悪く、まるで罪を犯したかのように、彼はテーブルへと近付いた。そこでは彼の妻が、膨らんで厚い殻を落としたアーモンドの実を、湯から引き上げていた。

家着の短い上着のポケットに手を突っ込んで、彼は彼女の背後に暫く突っ立っていた。そして

唐突に、妻に現れた微かな徴候——その見慣れぬ撓められた背中、肉体の奥に秘められた苦しい意思の努力によって押さえ込まれ微かに震えるだけの赤い頬、普段は敏捷に動く彼女の指のぎこちなさ——、彼は理解した。妻は全てを知っているのだと。

彼女が泣くでもなく、ベッドの柔らかい枕に頭を打ち付けるでもなく、見た目は平静に、しかしこれほどに激しく苦しみながらも、幼い子どもたちと共にそこに静かに座っているということが、そして子どもたちが母親を手伝いながらおしゃべりをし屈託なく笑っていることが、彼の心を痛いほどに突いた。

彼女の孤独な苦痛の感覚が、突如、彼に思いがけず眩い痛みを生じさせた。なにやら奇妙で意味のない鼻息を立てながら、彼は小刻みな足音と共に妻の元から離れた。つるつるに磨き上げられた寄せ木細工の床の上に、低い踵をした彼の短靴の立てる乾いたコツコツという音が撒き散らされた。灰色の顔をした背の低い彼は、音の響く廊下を通して己の書斎へと急いだ。ソファーに飛び込んでその背もたれに顔を伏せ、深緑色の皮革の上をのたうち、苦しみ、大きな息を零したかった。

背後の彼の小刻みなコツコツとした足音が去った後に、妻の顔は更に強く赤くなった。その顔の上では何かが戦い慄いていた。しかし、彼女はただ静かに座っていた。アーモンドの支度が終わった。青白い柔らかな手をタオルで拭った。ゆっくりと彼の書斎へと向かった。

彼らは並んで腰掛け、双方ともに涙した。だがそれも慰めとはならず、ただ塞ぎ込むのだった。

聖土曜日だった。セリョージャは眠っていた。そして夢を見た、奇妙だけれども喜ばしい夢を。

火のような昼であった。セリョージャの目の前には、太陽の赤い輝きに焼き払われた谷間が広がっていた。セリョージャは貧しい農家の敷居の上に座っていた。彼の日焼けした脚と服の粗い白布の上に、幅の広い二枚のシュロの葉が影を投げかけていた。

セリョージャは己を少年のように、まるで10歳も若返ったかのように感じ、とても嬉しく思っていた。貧しい布でかろうじて覆われた小さな身体は軽く、まるで地上に産み落とされた天使のようであった。全てが愉快であった。土、裸足が触れる濃密で情熱的な。大気、この火のようでありながらも軽やかな。空、この青くて高いがすぐそこから始まっているかのように近い。鳥の敏捷なる飛翔。隣接する農家の若者達の金切り声。低く良く響く声、――あまりにも突然に、新たな声がした。母の声であった。その井戸の傍には、他にも女性達がいた。白い服を着、浅黒い皮膚と裸の足を持った陽気な話し好きの、彼の母親とよく似た女性達が。

そこで母は家へと戻り始めた。彼女の肩の上には、長い細首の水差しがあった。それを押さえるために、裸の浅黒い腕が高く掲げられていた。眩しい夕焼けにより、彼女の頬は赤々と燃えていた。明るい鮮紅色によって少し開かれた唇は微笑し、浅黒い彼女の顔の上、長い睫の幅広い影の下で輝き、子供の黒い眼差しを喜んだ。誇り高い母親は自身の子のことを大層喜び、一方の子供も嬉しげに彼女へと手を伸ばして笑うのだった。

彼の手の中には玩具があった。それは彼が小川に浸して柔らかくした赤い土から作った鳥だった。土製のそれは、あたかも生きているかのようにだった

驚くべき小さな芸術家は、沈滞した粘土からそれを作り上げた。彼の指には生命力があり敏捷であった、そして粘土は蘇りたいと望んでいた。粘土から見事に練り上げられた鳥の体は、ぴくぴくと動いていた。熱い子供の指の中で、命を生み出そうという張り詰めた意思によって。

自身の荷物から逃れようと急ぐ母親が、側を通った。微笑み、すらりとした首を伸ばし、頭を上げた彼女は、情熱的な黒い瞳を嬉しげに笑う息子へと向けた。

少年は左手で母親の日に焼けた足を捕まえると、叫んだ。

「見て、ママ！」

自分の発した言葉が、異なる言語の他人の音となっていることに、彼は微かに驚いた。けれども自分のものではない言葉で話していることなどすっかり忘れ、その低くてよく響く言葉を理解できることに驚くのも止めてしまった。

母親は笑って、声を掛けた。

「ねえ、坊や」

少年は土製の鳥を手で持ち上げると、明るく言った。

「ほらママ、鳥だよ。僕が作ったんだ。まるで生きているかのように歌うよ」

彼は唇を土製の鳥の尾へと押し当てた。そこは笛のための孔だった。彼はそこを吹いた。――土の鳥の嘴から、軽やかな音が迸った。息を弱め、強め、少年は自分の土の小笛を吹き、変化に

富んだよく響く音を生み出した。母親は笑いながら言った。

「私の坊やはなんて腕が良いのだろう！ こんな鳥を作るだなんて！ 鳥を見ておいで、しっかりと持っているんだよ。お前の鳥が飛んでいったりしないようにね」

母親は農家へと立ち去り、自分の仕事に取りかかった。一方の少年は敷居の上で、彼の鳥の羽を撫でながら、物思わしげにそれを見ていた。静かに彼女に尋ねた。

「飛ぶたいのかい？」

鳥の羽が揺れ出した。

もう一度少年が彼女に尋ねた。

「飛ぶたいのかい？」

鳥の胸の中の心臓が打ち始めた。

三度、少年は尋ねた。

「飛ぶたいのかい？」

鳥の軽やかな全身が震え始め、羽が立ち上がり翼が打ち始めた。頭を左右に回しながら、鳥がさえずった。

少年は手を開いた。鳥は飛び立った。明るい藍色の空気の中に、彼女の嬉しそうなさえずり声が聞こえた。更に更に、遠ざかる。更に更に、小さくなる。更に更に、火のような太陽は昇っていく。更に更に、動かない空気は重苦しくなっていく。

セリョージャは目覚めた。べたつく汗に、そば濡れていた。

胸の苦しい痛み、重々しい呼吸——だけど君、かわいい鳥は一体どこに？ 僕が創った鳥は？
ほらそこ、窓の向こうで彼女は囀り、羽を震わせ、そして飛び立った。

僕の鳥！

けれど僕は一体誰なんだ？

体を少し持ち上げたセリョージャは、しかし再び枕へと沈んだ。うわごとを囁いた。

「けれども僕は一体誰なんだ？」

母親が彼の上に身を屈めていたが、セリョージャには彼女が見えてはいなかった。部屋の壁も見えてはいなかった。現在の彼を取り巻いていたものが、再度、離れた。

彼は一人で山にいた。

彼の前には広々とした場所が拡がり、火のような昼に照らされていた。彼の服は着古された貧相なものであり、彼の足は道の埃に覆われ、短い金色の顎鬚には灰色の埃が。

彼の同行者は、はるか下に居残っていた。オリーブの影の下で疲れて眠っていた。

彼の周りでは、光が更に明るくなり、広々とした空の輝きは更に荘厳となった。澄んだ空を飛び、天国の涼しさを運びながら、広く己の衣服の裾を吹き上げた二人の燦然たる男性が現れ、彼と向き合った。

彼は尋ねた。

「けれども僕は一体誰なんだ？」

「恐れてはなりません」。光り輝く二人が、彼に言った。「第三の日に君は甦る」。

彼の白い服は既に燃え盛り、彼の頭の上には既に火の色をした光の輪が、そして体の中の全ての血液が炎により燃え上がった。言葉に尽くせぬほどの激しい喜びが、彼の胸から大きな叫び声を生じさせしめた。

彼は目を覚ました。彼の叫び声に、驚いた皆がベッドへと駆けつけた。

青ざめた唇の左端から溢れた血液が、細い筋となって流れた。彼の顔は生氣のない白、その眼は驚いた様子で見詰めていた。彼の死の床に集められた懐かしい己の家族ではなく、それを超越したものを。――大きく開かれた眼、静止した恐怖。

黒き盲目の避けがたき彼女が、恐ろしい歯だけを白く輝かせながら、彼へと近づいた。永遠なる寒さ、永遠なる闇を漂わせながら。巨大なる彼女は、セリョージャの息を全て飲み込んでしまった。まるで真っ黒な雨雲のように、重たげに服の裾を揺らしていた。彼女は真っ直ぐにセリョージャへと突進した。

しかし燦然たる男性の、雷にも似た声が聞こえた。

「第三の日に甦る」

死の女客の黒い床まで達するマントの後ろで、聖日曜日の金色の稲妻が閃き、セリョージャの眼を喜ばせた。セリョージャの青白い顔は、電光の金の喜びによって輝き、彼の眼の中にはかすかな歡喜が。彼は息を切らせながら、囁いた。

「第三の日に甦る」

そして、死に行った……。

第三の日に彼を葬った。

渴望の書

<http://p.booklog.jp/book/84715>

著者：春色

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kkkate0303/profile>

ブログ：<http://kkkate0303.blogspot.com/>

出典

[БИБЛИОТЕКА РУССКОЙ КЛАССИКИ](#)

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/84715>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/84715>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ